

西条キャンパスの四季を楽しむ

総合科学部・自然環境研究講座 ◆ 堀越 孝雄

西条キャンパスは二百五十二万平米の広さがあり、探索してみると思いがけない時・所で四季折々の自然を楽しむことができる。ここでは、筆者が一年間の西条生活で得た穴場を、キャンパスを一周しながら紹介しよう。

理学部の南側、植物園との間に横たわる谷に、分類・生態学研究室が、放棄田を整備してつくった湿地の生態実験園がある。園内は、名札なども整備され水生植物などを観察することができる。清流(?)が貫通し、樹々により周囲から隔絶された世界は、大学構内とは思えない静けさである。



春まだ浅い理学部生態実験園

二月末に訪れた時には、園の一部はまだ残雪に覆われていたが、ネコヤナギの芽もふくらみ、小川の水面が陽光にきらめき、春の訪れの近いことがうかがわれた。出かける時には、マムシ

出現の心配もあり、足元をきちんとする必要があります。

理学部東側で下見中郷線を横切り、池の上学生宿舎に向かうと、その途中に山中池がひっそりとしたたたずまいを見せている。東側の、池の中につき出した半島には藤棚があり、シーズンには高貴な紫色の総状花を鑑賞することができる。道路の右側のがらがら山も大学のキャンパスである。山は手入れする人もなく、松枯れに追い打ちをかけられ荒れ果てている。そのために、藪に行く手を阻まれ、頂上に達するのは容易ではない。



学生宿舎を通り抜け、ブルバール沿いに東進すると、やがて右側に市民の憩いの場である鏡山公園が現れる。公園は大学のキャンパス外であるが、桜花の季節ともなると、あちらこちらに見たような顔の宴の輪ができ、広大御用達の花見場になる。

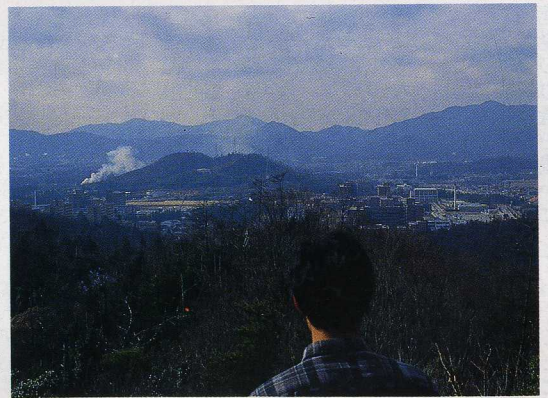
公園から鏡山山頂に向かって遊歩道を二十分ほど登ると、鏡山城趾に立つ。山頂にはちよつとした広場があり、キャンパスの遠望を楽しみながらしばし戦国時代の雄大内氏の栄華をしのぶことができる。帰路は尾根沿いに西向き道路を辿ると、学生宿舎と農場を結ぶ道路に出る。

農場に至り、建物敷地を通り抜け、



角脇調節池を南に望む

場内の周回道路を北東に進む。道なりに行くことやがて牧草地に出る。早春にはひばりが天高く舞い、秋には抜けるような蒼空の下、ちよつとした大平原の気分を味わうことができる。農場を出て、がらがら職員宿舎の側を通り、再びアカデミックエリア内に戻る。



鏡山山頂から西に広大キャンパスを望む

れている。秋には、まさに錦織なすといった風情で、東広島市の紅葉狩りの名所の一つにも数えられている。また、足元に目を向け道路に沿ったツツジやシャリンバイなどの植え込みをのぞくと、思いがけないきのこ狩を楽しむこともできる。梅雨の頃にはコムラサキシメジの大収穫に心踊らせられる時もある。工学部西側斜面のアカマツ林では、かつてマツタケもとれたそうだ。

小春日和の一日、角脇調節池の畔で池や西側に広がる湿地を眺めながらお昼の弁当箱を開けるのも、さらに初夏の候には、生物生産学部南側のニセアカシア並木をそぞろ歩くのもよい。休日には、ちよつと足をのばして、野球場で行われている近郊の高校生の練習試合を観戦するのが、野球キチの筆者のひそかな楽しみの一つである。

このように、西条キャンパスでは少し足元に目を向けると、思いもかけない奥行き(かいま)の深さを垣間見ることができ、楽しい。



コムラサキシメジ

プロフィール

(ほりこし・たかお)

◆専門は微生物生態学

◆生態系の物質循環における微生物の役割を明らかにしたいと思っています

◆広報委員会副委員長